

薰箱錄
末

增4
775
55



曾
775
卷
58

卷
五十八

董藕錄卷之五拾
目錄
今物語
住吉物語



石ころのうらみ...
小うらみ...
とうらみ...
まへ...
うらみ...
りり...
佛^佛...
清...
うら...
あ...
か...
の...
の...

人...
や...
...
か...
成...
お...
女...
し...
た...
馬^馬...
あ...
い...

六右衛門
左衛門
のちのち
を

事の時もあつたといふ

新拾

物もあつたといふは
らんといふは
のりぬ家もあつた
よりはつたといふは
めてなつたといふは
威乃あつたといふは
裏の六位かといふは
大納もあつたといふは
徳もあつたといふは
宗縁もあつたといふは
名もあつたといふは

つたといふは
おまはつたといふは
まはつたといふは
つたといふは

あつたといふは
つたといふは
つたといふは
つたといふは
つたといふは

つたといふは
つたといふは
つたといふは
つたといふは
つたといふは

まゝくゆりそとちり後中納言のりたりなるよからふあま
物そとほりもそとちり物せらぬかかこむにさるこたれ西
行小くありつらめあしこのもせとてふらわらぬり
はゆとほやとておひどしとたり

後白河院^{ミヤト}の沖時日吉は沖守有く一夜は御のまき
次の日沖下向首けるふぬの院に沖車送うはわら
まのりまふらんこらめの中よ

寛
まはる日くおひひのものとくし運ぶの出来
ころろとあわさほくる入をて移へた馬柱に
あつらる人つらふされたりとらとて見せま
作有られおこさく

今日いなるもあはれくかぬらふと付たりはまに

まらりたること口かこもあひさうありたることいひ
あつらひらいたら様次お家の御所おれお人たりたるふ曉
つひせたる入とらりくしてうりならよまのりせらうお
いさくありて神よたまりありたることとて

あとするの行をもおはほりせらるこしひありたるこ
つひるありたる入はほほりたれお兼任人長そとらり
くしてたるころは打をせくきこさるたれお兼任つけ
ありとおわあつこいおれて下痛いのそとらるこ
ひひたることなぬかめとらまて

あいらさくははる海ひてと付ありたるゆふ兼久
兼方ありたる子孫とおわえとくいやりかたりたる

おしとおれた人のいふ今条のゆかみさなりおれた給とめ

となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
きくしむれはるふ打つかつたて

^{菟那}

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

^日

波乃打若かりたをきくしむれはるふ打つかつたて
あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

あまにせしむるをわねにけりきりひられた水に写す紙を
せしむるふゆをわねにけりきりひられた水に写す紙を
となくするより一筆えられた紙よひて横紙よ知さるるを

^{基房}

きふふと油きりのたれに我あつちぬらぬらぬら
まひ人のふらぬ油をそ日とむかへつらぬら
宮の言百はけけりすまもあひあひにいひぬらぬ
けうつらりけけりすまもあひあひにいひぬらぬ
またちちのまはるひりすまもあひあひにいひぬらぬ
る秋のぬらむかへつらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
幸のよすやむらんむかへつらぬらぬらぬらぬらぬ
ねとむらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
今又待ちぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
中へつらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
ぬかへつらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
きる盤と押おてぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ

今あふふらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
らぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
後ふみそのぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
東ふらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
とも風よりかへつらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
村なつ福とむかへつらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
いひぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
のほいぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
なうらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ
をばもしぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ

くろくもつひにわくはるまをともみく村の木の
角へまひなむしをせむらうたやのこまをり

小式部内侍大^{叔通}三條俊成の御成り

まけるまられかあがわらふまをりこまをり

くらふ車は音あもまをりこまをり

物えく物もすまをりこまをり

海もるまにまをりこまをり

愛あぬまをりこまをり

まをりこまをりこまをり

の神まをりこまをり

おのりまをりこまをり

いほわりのこまをり

小大をりこまをり

まをりこまをり

まをりこまをり

まをりこまをり

まをりこまをり

まをりこまをり

まをりこまをり

小大進

まをりこまをり

まをりこまをり

ほふ信を致して佛をばはるるゆつとていふ身もな
るん世の事おもしろひて此あまらみつとるゆつと
あひてま日山とぬりきりよらる指より菩提の及とあふ
の道とつと出おのまえたりとるなりかく信おりのたふ
とくおあこしる

初え乃ふよりのほる備ありていふ法師の背たり坊にあふ
柿の本流中けると物くだんといらりたれとよりあり
たる中よらるるまらるる文章は似たりとるはあ中とあひて
坊さふみとありたれいもやゆ流に佛と文章あくとまける
あつに採といふとらりあて横川の長史は法官といひる
人よとありたれ上高門流あり柿と社ふあとりありふ
持て参りくとあ流をさせられいとせむひて後白川流ふゆつ

せは流むひてたり蓮花院の家流は納りたるとあふ
とそとく人あきとていさし流りゆけるとなん

安貞のあり河内む百姓とらるるあふ蓮花とといひるわ
らありの年り七なりとる年死らるる念佛とて西ふ向くか
りとる人よ我れあつと七月といふんあ家て見よとて死な
たりと後人のあふ必あ家とつあみとるあてけと念利
よ成たりとととて人よあゆんといふりらあふちやとて
入りたりふは様とわとれいびりあひありとるはんたれと

帰命蓮花王 大聖觀自在
廣度眾生界 父母善知識
とくひてとて乃文字法所よとられてありまふい
たふめとくあ流事也

かきこ入たりり名をいひおそりてはん
わんおよりあるま後いとのんちあてい
り念仏のりうはなまよした事ひくくたふひ
あひたりやんもあろおきけおくしゆねくそとの
やうに深念よまたりとをゆきりて天魔のあらう又
わんあしおひかりうゆねにういひあまなり

寂蓮
妙補入道

うおめりとのとらて

此のうあしりあてくもたかかいつるのゆきり
あていおらうらうの真あそくおとけいんあたる
よんそゆめりすてうあはがみくゆきり
うやあちあ様うあ

五

風のうらてねくおふくおのちあてすあお
風のうまてお流しりあ人のあてひてゆりき返す
手あおの風うらひりた月あすのまをうす
あ人うまて後う流なるゆりああうらうあこのお
わああはるうて

我あつふすあうあこのうらうもああも今をう人の
あれたあてりあてりあてりあてりあてりあてりあ
て人のあまきすあてりあてりあてりあてりあてりあ
成人ああまきすあてりあてりあてりあてりあてりあ
りあてりあまき何人あてりあてりあてりあてりあ
あてりあてりあてりあてりあてりあてりあてりあ
あてりあてりあてりあてりあてりあてりあてりあ
あてりあてりあてりあてりあてりあてりあてりあ

乃名紙を……してなとありしるは……ふ奇とをきぬ……人
に……向……と訪ひ……ひ……

桐童……ゆ……と……
い……

金葉雜上

疾と金ふか

杖より……

ゆり……

国語内條

ほ……

な……

者……周防内條……家……
家……
あり……有……
よ……
も……
は……

何……

中……

れ……

い……

南……

ゆ……

い……

と……

お……

明……

と……

い……

乃初秋上

ゆれたるおめりこそ後まゝに氏名をとりてさだめりて
まづひらりたるもと申すありかゝるいふて

物々 かく記のまじはやりつこたむれりま井ふありとみ録の
をり一とたるやんありておぬもは内分のふせり
ゆりやうおよひのあはれこそいふりたりけりや

後拾遺と云ふはさるる附奉弟方といひたる後身

金雅者

玉井やうもさるる御縁よりなるとありて

はゆりたれと云ふとよみく通俊ふ人なりとゆりて此
分入んとありと云ふはたしとゆりていぬの存ふは

拾遺雜春

谷徒

まよりる人といふとせりりたるものなれたる
高うありとありけりといふとありとありといふも

まことそ
人といふ
山といふ

いとあり
御方

て斗りてけりありとあり

前集卷上
四段

あり法師の陰をたふし流のけりよあ哉集えら
りてまてやうとありとありとありとありとあり

今初より
おとあり
あはれり
下句

あひまより此集の事とて同ていふあり
時を何は若秋のたふ言とありや入ありと
ありありとありとありとありとありとありとあり

或人がよみ集て二位人をいふとありとありとありとありとあり

とありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり

いひたりとありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり

東島籠
山内の子
やまといふ

せまらんといふとありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり

とうらふ
つれは
つれは

山々ののほほほのあなつらふとぞとみそ
のうらふとぞとみそ

下毛野武野のいひなるは乃の因白敷のふらあひまじし
沙をゆふゆふけふとてははらふとつちひらさ
うーあかゆーとてゆく林とてうゆひさふらす
まじりひありたれははいあさまじいむくたり女ん
うけゆくかまこまうは乃折ゆく素兼弘せりふ池
力あひしておのあひの先はつとてく敷くふらまじ
目何のこまたれはいあうふゆくまうのそとせりまじ
橋吹林とてうゆふとていふよは兼弘の弟方とゆふと兼久
う子なりまじらうやうの事ゆえあり若とては橋ゆら
まじらうか府生敷とおとひのまじりひとらふと

いふゆくとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ
うとていふおはらふとてありとてゆらとゆへとゆひ
らうとていふおはらふとてありとてゆらとゆへとゆひ
たれはゆくとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ
のちとていふおはらふとてありとてゆらとゆへとゆひ
くといひあまうとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ

七十四

あね流乃の府乃の感はは勝らゆゆ年々とて人といはせ
たれはゆくとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ
とていふあまうとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ
今四年はゆくとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ
とていふあまうとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ
ははせらゆくとてゆく林乃の兼弘あまうとて人といはせ

文學上人依波由の流るれありきりうる細りきたりり
ふあるるんてこれききみりしり

りりきりしりきりしりきりしりきりしり
りりきりしりきりしりきりしりきりしり

此上人のりりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり
りりしりしりしりしりしりしりしり

りりしりしりしりしりしりしりしり

あけふたり人こけくおひあたりたり

右今物語以村井致義幸書寫以屋代弘賢後田茂祐奉
授合る

右四百八十二雜部

文政十四年卯年正月廿六日於徳用郷写之

中村直道

薰箱録卷之百廿四

薰箱録卷之百廿五

中村直道輯

住者物語

切中納言はくは書信をさる人給り人
二人をけそそわひしはる一人ハ時めく諸事
の心そめそはるくは女君二人以そはるに
けりいゆりさるやりしはるはあそけり
けりいゆりさるはくは中納言はく
わひしはるはるはるはるはるはるはる
すこはるはるはるはるはるはるはる
おとひしはるはるはるはるはるはる
かへはるはるはるはるはるはるはる

おさ

おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる

おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる
おはるるもつとくはあはれなる
かたはれはあはれなるもつとくはあはれなる

ちりぢりな心の中へ
のびやかなる花の
影をうつしあはせ
ておぼえよ
まはりの光り
をまはりの
花の影にうつし
あはせよ
まはりの光り
をまはりの
花の影にうつし
あはせよ
まはりの光り
をまはりの
花の影にうつし
あはせよ

あはれな心の中へ
のびやかなる花の
影をうつしあはせ
ておぼえよ
まはりの光り
をまはりの
花の影にうつし
あはせよ
まはりの光り
をまはりの
花の影にうつし
あはせよ
まはりの光り
をまはりの
花の影にうつし
あはせよ
まはりの光り
をまはりの
花の影にうつし
あはせよ

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

是の如く... (Handwritten text in cursive style, likely a prayer or invocation, starting with the character '是').

此の如く... (Handwritten text in cursive style, likely a prayer or invocation, starting with the character '此').

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, starting with a large initial character.

Continuation of handwritten text in cursive script, showing fluid connections between characters.

Continuation of handwritten text in cursive script, maintaining the same style and flow.

Final section of handwritten text in cursive script, ending with a distinct character.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Urdu or Persian, covering the left page of the manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 15 lines of text, with some lines starting with a small decorative flourish or initial. The script is highly fluid and interconnected, characteristic of the Nasta'liq style.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Urdu or Persian, covering the right page of the manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 15 lines of text, continuing from the left page. The script is highly fluid and interconnected, characteristic of the Nasta'liq style.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

か清くありつゝのひる侍はわが家女とくありつゝの事
の人とありまて内侍ありぬる事今もあつて
らわひらきとありてん事とてとてとてとてと
けりてとてとてとてとてとてとてとてとてと
はまの事とてとてとてとてとてとてとてとてと
ゆりてとてとてとてとてとてとてとてとてと
うりてとてとてとてとてとてとてとてとてと
うりぬとてとてとてとてとてとてとてとてと

右位者物籍以活板并屋代弘階本校合

群書類従巻第百十 天保三 庚辰冬十月十日夜

於燈下書字とて早 芝蔴録巻之百廿五 中村萬喜直道

芝蔴録巻之三十一終

